



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

＜動向＞キャンパスにおける多様性尊重にむけてのソーシャルアクション：第6回関学レインボーウィークを振り返って

著者	武田 丈
雑誌名	関西学院大学人権研究
号	23
ページ	41-45
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027621

<動向>

キャンパスにおける多様性尊重にむけてのソーシャルアクション： 第6回関学レインボーウィークを振り返って

武田 丈

6年目を迎えた関学レインボーウィーク（以下、KGRW）は、「Zero Discrimination: このキャンパスに『ワタシ』がいる—『私らしさ・あなたらしさ』を大切にできるキャンパスをつくりたい！—」をテーマとし、西宮上ヶ原キャンパスと西宮聖和キャンパスでは2018年5月14日（月）から18日（金）にかけて、神戸三田キャンパスでは5月21日（月）から25日（金）にかけて開催された。本稿では、2018年度のKGRWをプログラムごとに振り返ったのちに、前号の最後に紹介したKGRWをベースに実施されているキャンパス内の多様性尊重にむけてのソーシャルアクションの進捗状況を紹介する。

1. KGRW2018のプログラム内容

(1) オープニングイベント

「より多くの学生にKGRWのことを知ってもらおう、その趣旨を理解してもらおう」ということを目的としたオープニングイベントを、西宮上ヶ原キャンパスでの初日にあたる5月14日（月）の昼休みに中央芝生で開催した。昨年に続き晴天に恵まれたイベントには、100名近くの参加者が集まり、村田学長らによる開会の挨拶に続き、聴衆者たちの持つレインボーフラッグがはためくなか、ゲストのバンドHIVが「Zero Discrimination」という楽曲を披露してくれた。『『止まない雨はないんだ』と笑った人が

嫌いで、濡れたこともない人に何がわかるんだろ。…zero discrimination 雨空に虹がかかって。zero discrimination ボクはそこにたちすくむだけで」と唄うこの曲の歌詞に、参加者はさまざまな想いを馳せた。

(2) パネル展

一昨年度より3キャンパスで開催しているパネル展は、西宮上ヶ原キャンパスと西宮聖和キャンパスが5月14～18日、神戸三田キャンパスが5月21～25日の日程で実施された。これまでのように「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」や教職員からのキャンパス内の多様性を尊重するメッセージなどを展示した。来場者からは以下のようなコメントをいただいた。

レインボーウィークのある関学が誇らしいです！みんな一人じゃない！

このような取り組みがあるのはとても素敵なことだと思います！みんなちがってみんないい！

このRWって本当に当事者のためになってる？

(3) LGBT 関係図書の展示

関学図書館の企画として、昨年に続きKGRWが始まる以前の5月7日から5月28日まで、西宮上ヶ原キャンパスの図書館1階のミニ特集コー

ナーにおいて、LGBTQ 関連の書籍の展示をしていただいた。

(4) 映画上映会

例年通り、今年度も以下のように映画上映会を開催した。

上ヶ原キャンパス：@大学図書館地下1階ホール
5月14日（月）15：10～「ロシアの同性愛者のいま／過酷な現実」（2015年、イギリス）

16：50～「あしたのパスタはアルデンテ」（2012年、イタリア）

5月15日（火）15：10～「逃げ遅れる人々／東日本大震災と障害者」（2013年、日本）

16：50～「アルバート氏の人生」（2013年、アイルランド）

(5) 交流会

性的マイノリティの学生たちがお互いにつながる機会を設けるため、今年度も5月16日（水）の18時半より交流会を実施し、20名以上の学生が集まり交流を図った。また、下記の人権問題講演会のために前日に来阪された講師の牧村朝子氏も後半から参加し、交流会は盛況のうちに終了した。

(6) 人権問題講演会

毎年 KGRW 中に開催される多様性尊重をテーマとした大学主催の人権問題講演会は、5月17日（木）の2限に神戸三田キャンパスで、当日4限に西宮上ヶ原キャンパスで開催された。今年度の講師はタレント・文筆家の牧村朝子氏で、「なぜ性の用語はだいたい横文字なのか～LGBTとかセクシュアルマイノリティとか～」と題してお話いただいた。LGBTという概念や用語が生まれた経緯、定着した経緯を、歴史を遡ってわかりやすく紹介するとともに、LGBTとそうでない人た

ちという2項対立ではなく、すべての人にかかわる事柄であるという認識をしていくことが重要だと話された。来場者からは、以下のような感想が寄せられた。

今、LGBT だったり、性的少数者などカテゴリーに分けてたくさんの人に認知してもらうことがどんどん進むことによって、そのカテゴリーがなくなっていく、みんな違って同じ人間だってカテゴライズされなくなるようになるのではないかと思います。カテゴライズされて特別扱いされなくなる世界が、きっと牧村さんなどの声をあげて講演会をしてくださる方のおかげでくるのではないかと希望がもてました。

LGBT に関する歴史などを知れて良かったです。今日のお話を聞いて、たしかに今の日本ではLGBTの人たちがマジョリティと隔てられている部分はあるなと思いました。世間がそういった人たちにイメージを、役割を押しつけているなと実感しました。

LGBT について、言葉は聞いたことはあるし、意味も知っていたけど、あまり考えたことはありませんでしたが、今日のお話を聞かせていただいて、差別は自分の気付いていないうちにもしてしまっていることもあるし、社会でも当事者だけが感じる差別がまだ色々あるのではないかなと思いました。

(7) パネルディスカッション「当事者の座談会：学生生活とLGBT」

昨年度に続いて実施された、性的マイノリティの現役生の企画・実施プログラムであるパネルディスカッション「当事者の座談会：学生生活とLGBT」は、5月16日（水）の18時半から図書館ホールで開催された。現役生4名（バイセクシュアル2名、ゲイ1名、トランス女性1名）が登壇し、それぞれが当事者であると自覚した時期、周りへ

のcoming outの状況、小中高校時代の生活を振り返ったのち、関学での学生生活の中で経験したこと、感じたこと、考えたことについて語ってくれた。以下にその一部を紹介する。

関学の対応や当事者サークルの存在

1年生の後半に当事者サークルで仲間に出会って、やっと自分のことを話せるようになった。それまでは（学内で）黙っていて、しんどかった。サークルに入ってから楽しい。恵まれていると感じている。

トロントに留学した際にプライドに参加し、日本よりオープンな感じを体験できた。語学学校でゲイのおじさんに出会って相談したら、励まされた。いい経験ができた。

当事者サークルに入って自分以外の当事者に出会えて、「自分以外にもいたんだ」ということを実感できた。でもサークル以外だと差別的な発言もあって、しんどい。でも、サークルがあってよかった。

学生証の名前を変えられて、それを外の社会でも活用できてよかった。また、大学が健康診断で個別に対応してくれたり、トイレの名称変更を検討したりしてくれて、ありがたいと感じた。関学に合格した際に、人権教育研究室と連絡をとって関学の対応や当事者サークルの情報をもらえた。国立大学にも合格したが、その大学に電話で問い合わせたがきちんと対応が確約されていなかったのので、関学を選んだ。

大変だと感じること

差別はまだある。卒論でLGBTのことをテーマに書こうとした際に、指導教員に変な研究テーマだという印象を持たれた。自分はバイセクシュアルなのでどっちつかずの意識も持ってしまうけど、そのままでいいと言ってくれる

仲間が支えになっている。

特にない。でも、同性の友だちと恋愛の話のとき適当に答えて大変だった。

トランスジェンダーは本当に大変なことが多い。たとえば、毎月の注射代や手術代をどうするか、いつ手術をするべきかなど。LGBがうらやましい部分がある。LGBと比べると、トランスジェンダーは体の問題がある。だからトランスジェンダーのほう大変だと思ってしまう。

アライについて

アライと「きらきらアライ」がいる。特別視しないで、当たり前として受け入れてほしい。押しつけがましい人はいや。「かわいそう」という目で見られるのはいや。固定観点で見られるのはいや。

アライの人とそんなにかかわったことはないけど、「LGBTを理解している私はえらい」と思っている人はいや。それがきらきらアライ。当事者の人の気持ちを汲み取ってくれる人がいい。キラキラの人も素質があると思うので、そういうようになってほしい。

アライということを名乗らない、知らないけど自分を受け入れてくれる、そういう人がいい。きらきらアライも踏み込んできてくれているので、一律拒否するのもどうかとも思う。仲間を増やすことも重要だと思う。

ノンケにもの申す

セクシュアリティに関係なく、好きな人、好きじゃない人がある。男性女性に分けて考える人は嫌いです。

レズビアンだからこうとかという見方ではな

く、その人をみて判断してほしい。決めつけはだめ。そうしたら差別はなくなる。

有名人のおねえ芸人のイメージと LGBT を混同している人が多いけど、一人ひとり違うことを知ってほしい。一人の人間として理解してほしい。特別視してほしくない。

なお、来場者からは以下のような感想をいただいた。

来られてよかったです。正直自分は LGBT に所属するのか、自分でもよく分かっていないです。でもここに参加して、少し安心した、気が楽になった気がしました。

個々の人権のあり方や尊重され方のヒントになりましたし、アライというよりは支援者、理解者、そばに居てあげられる人になりたいと思いました。このような機会がたくさんあれば理解者も増え、理解者のあり方も自然と身につけて色んな人が共存できる社会になると感じました。

去年も来ました。当事者が話すこの座談会が、レインボーウィークのイベントの中で一番おもしろいと思います。学生の皆さんが、すべて準備されているのですか？それぞれ体験を言語化することに長けておられて、聞き入りました。

(8) 映画上映会&トーク

KGRW の西宮上ヶ原および西宮聖和キャンパスの最終日の5月18日(金)の16時50分からは、先端社会研究所と共催して映画『私はワタシ～over the rainbow～』の上映会と、映画関係者によるトークセッションが開催された。この映画は、41人のLGBTのインタビューに基づくドキュメンタリーで、一人ひとりが本音や個人的な想いを語っている。トークセッションには、この

映画の総合プロデューサーである女優の東ちづる氏、この映画の監督でミュージシャンである増田玄樹氏、そしてこの映画の出演者であるジャンプラス理事の長谷川博史氏が登壇した。この映画を制作した、東氏が理事長をつとめる一般社団法人 Get in touch は、すべての生きづらさを抱えた人たちが自分らしく暮らせる「なぜこぜの社会」を理念にかかげ、アート・ファッション・音楽・映像などを通じたマイノリティのPRを展開している。この理念に基づき、この映画も「説明する映画」ではなく、「みんな幸せになりたい」というメッセージを伝える人権の話であり、LGBTを便宜上使用しているが、不要となる社会になればいいという願いをもって制作されたこと、また活字で読んで勉強するのではなく感じるのが重要だということが語られた。

2. 関学における多様性尊重のためのソーシャルアクション

昨年度の KGRW の報告文(武田・飯塚, 2018)で紹介したように、2015年度の第3回および2016年度の第4回 KGRW での Web 調査の結果を基に、キャンパス内で性的マイノリティの構成員が抱える課題に関して、関連部署と改善に向けての交渉を2年間に渡って続けてきた。その結果、学内のトイレの名称・表記に関しては、1階にある多目的トイレに関しては、障害者の人たちの使用が制限されることのないように現行の表記(ピクトグラムのみ)のままとし、それ以外の階に設置されている多目的トイレに関しては、現状のピクトグラムに加えて「多目的トイレ」という表記をつけることで学内のコンセンサスを得ることができた。そして、すでに2018年度の夏休みに改修工事のあった西宮上ヶ原キャンパスの大学図書館と第4別館のトイレには「多目的トイレ」という表記がつけられ、それ以外のトイレに関しても今後表記が順次付け加えられる予定である。

昨年度の報告文でもう一つ提案していた「関西

学院 インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針（仮称）」の制定に関しても、一定の進展が見られた。関西学院のミッション展開推進委員会の下にあるインクルーシブ・コミュニティ促進委員会が中心となり、人権教育研究室も協力して原案作成し、関西学院の幼稚園から大学までのすべての学校に内容を確認してもらって修正を行い、現在公表に向けての最終段階に入っている。来年度のこの KGRW の報告文では内容の詳細とともに、この行動指針に基づいて関西学院全体が多様性を尊重するキャンパスへ一歩も、二歩も前進していることを報告できることを願っている。

参考文献

武田丈・飯塚諒（2018）「フェスティバルからソーシャルアクションへ：第5回関学レインボーウィークを振り返って」『関西学院大学 人権研究』22, 55-62.